
ふたりの時

西崎皓之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたりの時

【Nコード】

N79370

【作者名】

西崎皓之

【あらすじ】

大学卒業後、結婚した弘樹とはるか。

五年の歳月が流れて、彼らの生活は？

ふたりの間に何かが起こる、さて結末は？

はじまり

はじまり

どうしてこんなことになったのか、

弘樹は闇の中を手探りするように記憶を確かめていた。

しかしどこかで途切れてしまっただけで辿ることができない。

何度も思い出そうとするのだけれど、

底なし沼に、ずぶつと

足を入れるような不確かさのまま潜り込んでしまう。

もしかしたら地球の裏側で起こった蝶の羽ばたきが、
すべてを狂わせてしまうような、

その聞こえない羽音がどんどん大きくなっていった、
空から隕石が降ってきた。

ああ、その衝突の波動が
空を覆い生きている物を破滅させていくのだ。

空が暗くなり閉じ込められた彼は、
まどろみの中で叫ぶ。

その叫びは暗闇を切り裂いた。

そしてそのとき目が覚めると、はるかはいなかった。

最低限の荷物をスーツケースに詰めて、
旅行でも行くように彼女は消えてしまったことや、
きれい好きの彼女が少し慌てたように部屋を出ていったのが、
部屋を見て回っていて弘樹にはわかった。

彼女の躊躇や、
それでいて決然とした様子が
彼が寝ている部屋の外で起きていたことが手に取るように彼にはわかった。

そして彼女は声をかけることもなく部屋を後にしたのだった。

彼女はなんでも独りでできるから、そのことで心配することはなかった。

ここが東京でなければ心配しただろうが、あるいはまた、そうであれば、その前に彼女はそういう行動をまず起こさなかったのだろう。

彼女は仕事で使ったことのあるホテルにタクシーで向かったに違いない。

母親のところとか、友だちの家には行かない気がした。

そんなことで心配させたくはなかった、と彼女ならきつと言っただろう。

彼女はそういう性格だった。

弘樹だって、あんなことがなければ、そこまで心を鈍感にする必要もなかったんだ。

何度かの夜が来て、何度めの朝を迎えた。

今日は何日だろう。

彼はいつものように仕事をして、だれにもその事を話さなかった。

ただ弘樹の何度めかのメールの返事は、

「心配しないで、それに探さないで。時間がほしいの」

と打たれていただけだった。

たぶん彼女の仕事場に行けば、見つけることは出来るのだろう。ただ、彼がそうしなかったただけだった。

日常は絶え間なく時を刻んで、人は知らずにどこかに運ばれていった。

夏の昼下がりのように時間が流れ、小さな岩だけが取り残されている。

その岩を他人事のように弘樹は眺めていた。

どうしてこんなことになったんだろう。

巡り巡ってまた同じ質問に戻ってしまう。

学校の卒業が決まると二人はすぐ結婚した。

親戚間の簡単な披露があり、形だけの卒業旅行を兼ねた新婚旅行に

出かけた。

なにか二人でけりをつけたという感じだった。

ラブラブという感じのところは通り過ぎてしまっていた。

四年近い付き合いと五年の結婚生活、長過ぎた春と、過密な勤務。

子供ができなかったこと、

あるいは作らなかったことが、納得はしたことではあったが、弘樹には微妙な鬱屈を与えていた。

じっさい与えていたのだろうか。

言い訳にすぎないんじゃないのか。

ただ、変化を求めていただけではないのか、それでそんなふうになつていったのではないのだろうか。

はるかも忙しかった。

朝だけは一緒に食べるという約束も段々間遠になつていった。

何故かといえば、弘樹の仕事が夜遅くてはるかの出勤時間に起きてこられないからだつた。昼ちかくに起きだして、用意してくれた食事を温めて食べた。

すれ違い夫婦、ただそれがそれほど不自然と感じなかったのが間違いだつたのだろう。はるかは感じてたかもしれないが、自分から言い出しはしなかった。

だから仕方のないことだと諦めるよりほかに方法はなかった。

お互い仕事を持っているんだから、それが二人の結論だつた。

あとは休みを調整するしかなかったが、それも社内の責任とともに難しくなつていった。弘樹は日曜に休める職種ではなかったからだ。

弘樹は自分を責めたが、それは真実そう信じているからとは自分でも考えられなかった。

本当はそうではないのではないかと疑っていた。

はるかを直接責めることは、最初から考えられなかった。

だから自分が、という気にはなるんだが、実際どのくらい身に染みていたかとなると心もとない。

自分が悪い悪いと言いながら、全然反省していない厚顔の者にさえ思えてきてしまうのだ。

現実的には、悪いと謝るのさえ苦手な性格ではあったのだけれど。

考えることより問題は、態度であったり、行為であるはずだった。いざその段階になると抜けていくものがある。

それは若いとか未熟とかいわれるものなのだろうか。性格の中のそんな部分が行動の中で顔を出すのだ。

ひどく高名な人が生活の中で、子供じみた妄執にとられるのはよく聞く話ではあった。

別に弘樹は高名でもなく、子供じみた考えにとらわれているわけでもなかった。彼は自分に自信があったから、傲慢になることがあったのかもしれない。

卑屈になるよりはましであるとしても、生活をとにする身にとってはきついものなのかもしれない。

強情で融通が利かない。

実を言えば、それは両者に当てはまってしまふものなのだ。だからどこかで妥協しなければならぬのだけれど、簡単にできない場合があつた。

それがいつもケンカの原因になるのだろう。

当時はつきりとわかつていたわけではなく、
今、冷静に振り返ってみると、

そういうことなのかもしれないと半分納得するに過ぎないのだけれど、

当時はそういうふうに考えることさえできなかった。

意地の張り合いのようになってしまふし、
折れることができれば口を利かない、
というようなことにエスカレートしていった。

はるか曲がったことが嫌いで頑固だつた。
それはそれを非難しているわけではなく、
はるかはそういう性質だつたのだ。

弘樹は弘樹である種、信念の人だつたから、譲れない一線があつた。
お互いそれは尊重しているはずなのに、
生活の積み重ねの中で衝突が起こるのだつた。

それは本当に些細なことで、
例えばどちらがコーヒィを入れるのか、
といったことでも争いの原因になつた。

弘樹は家事は分担しようと言口では言うくせに、
実際は全然手伝ってくれない、と彼女は非難してくる。

そうすれば、いやそんなことはないよ、と言わざるを得ない。

そうだね、

と引き取る度量なり、ノウハウがあれば、
また違った展開になったかもしれないが、彼にはそれができなかった。

洋装の服に着替えたけど、

髷を結ってるみたいな考えと行動のギャップの中に彼はいた。
明治時代の知識人みたいに。

料理は弘樹も作るし、シチューなんか、かなり上手にできたりするけど、

少しお金かかりすぎ、とか

跡片づけちゃんとしてとか、彼女に言われてしまう。

でも食器どこに置くかわからないんだから、

この前全然違うとこ置いたでしょ、って怒ってたじゃない。

そうなるかと考えと行動の間の問題ではなく、生活のスタイルの差異
になってしまう。

お互いの親との生活様式をどこかで模倣していることに気づくのだ
った。

あるいは自分の子供のころの記憶を踏襲しようとする無意識に行動して
しまうのか。

はるかが左手に箸を持つのに気づいたのはいつのことだったのだろう。

初めは隠されていたわけではないだろうが、その事に気づかなかつたし、

今でもそれが間違えだなんて、思っていないが、ひょんなときに気になるのだった。

要はそれははるかの属性みたいなもので、それを含めて彼は彼女が好きなわけなんだけど、

生活の端々で違う顔のはるかを発見するということだったんだ。

彼女は仕事でひどくストレスを感じていたのかもしれない。

頑張りすぎているように思えた。彼女の勝気さが、プラスに出ることとは多いけど、その反動が彼との日常に現れているのだろうか。

弘樹の仕事は、新聞社の校閲部で嘱託身分だったから、競争とかの埒外にいたし、それは彼の望みだった。

それでも時間が経てば仕事の内容は増えていった。

所属してわかったことだが、スポーツ紙を作るのに社員三人で回していた。

あとは、フリーランスの記者とか、弘樹のような嘱託社員。

通信社の記事を引っ張ったり、本紙からまわされたり、独自の取材とかをやってる暇がなかった。

どこでも台所は大変ということなのだろうか。それともこの会社だけなのだろうか。

賄い料理のようなお得なおいしさは何もなかった。

遅番の帰りは深夜の3時を回るし、シフトも不規則だった。でも、その仕事を彼は気に行っていた。だから続いているんだと思う。

新聞を作って行くという、ざわめきと緊張感がそこにはあった。

それに締切りを終えた後の解放感は何ともいえなかった。

東京の地方紙だったけど、それでも多くの読者に支えられているのはわかっていた。

はるかには希望通り、中堅の出版社に就職した。

マスコミ関係も志願したみたいだけれど、こちらは入社が叶わなかった。

出版社の方は存外高い評価を受けたようだった。

だから彼女は張り切っていた。すぐ女性雑誌の方に所属して、取材を始めた。

最初は手伝いということだけど。

だいたい三年はシステムを学ぶためにいろんな部署に飛ばされる。

新聞社なら、整理部というのに必ず回される。地方版のレイアウトから記事の選択までほとんど自分でやらされる。もちろん上司が目を光らしているんだけど。

それから地方の支局へ配属される。

三年は戻れない。そこから先は能力次第かな。もちろん希望もあるけど。

直接の原因はわかっている。

はるかが無断で外泊したことだ。

彼女はうまく嘘がつけなかった。

いままで嘘をつく機会があまりなかったのだろうが、何をしていたのかの質問の答えが不自然だった。

どうしてなんだろう。

やはりここでも彼女は、けりをつけようとしているのだろうか。

隠すつもりもないけど、話すつもりもないんだ。

だから弘樹もそれ以上追及することができなかった。

彼女もまだ自分がどうしたいのかわかっていないんだ。

どうなるのか自分で試してるのかもしれない。

それで何度かの些細な言い合いの後、彼女が家を出て行ったんだ。

弘樹もどうしたらいいのかわからなかった。

でも実際は淋しいけど、少し解放感を覚えたのも事実だった。息苦しくて一緒にいるのが辛かったから。

たぶん、はるかもそう感じているんじゃないだろうか。

淋しいけど、少しすっきり。

もちろん、というほど確固たるものではないんだけど、籍は入れていた。

はるかはやい出さなかったが、

母親が籍ちゃんとしてくださいね、と言った。

その時までどちらでもいい気がしていたし、

なんだか書類の作業が大変だな、というような意識しなかった。

子供でもできたら入れるかな、程度の認識だったんだ。

そうなってくると彼の無頼さだとか、通俗性のなさが徒になってくるようだった。

創造的な仕事には向いているとしても、一般的な生活とはいえなかった。

というよりどこまでも猶予されているに過ぎないのだ。

弘樹はその事を自覚していたけれど、直す必要を認めていなかった。もし必要ならどこからそれを強制してくるはずだった。

そのとき考えればいい問題だし、今がそのときであるとは思っていなかった。

はるかだって、女性であることによる違いはあるとしても、それほど変わってはいないんだろうと思っていた。

事実そうだったんだが、時間が変わることを必要としていることもあった。

彼女にとっては今がそのときである可能性はある。

学生時代の気楽さから社会の第一線に出ていったような緊張感を彼女は持っただろうし、それに適応するためにも自分を変えていかなくてはならなかった。

その方が普通だし、彼の方が不適應なのかもしれない。

でも、そんなに違っではないなかったんだ。

そこだけが原因ではない。

人間飽きることもあれば、決まった日常に退屈することもある。

弘樹は隠れて、と言うほどのことではないんだが、すべてを告げないまま飲みに行くことが増えた。

遅番の時は無理だが、早番の時はよく、同僚や先輩と飲みに行った。よく、それも仕事のうちなんだ、と言う人もいるが、そこまでは居直れなかった。

どこかで、後ろめたい感じを抱きながら、店のドアを開けた。

でも、飲み始めてしまえばその解放感に酔いしれた。

なじみになった店の子と歌を歌ったり、下手なダンスをした。楽しくて、つい時間を過ごした。

帰れば、もうはるかには寢息を立てていた。

そんなことが度々になってもはるかは何も言わなかった。

信頼、と言われれば信頼されていたんだろう。

飲んで遅くなったと言えば、気をつけてねと言っただけだった。

彼女は他に考えなくてはいけないことが山ほどあったんだ。

定期的に性交渉はあった。

それなりに充実していたと思う。

空かしたお腹を満たすように、お互いの欲望を満足させていたんだ。それが、彼女にとっての愛だったのだろうか。

ひどく馴染んで、大好物をゆっくり味わうようにセックスをした。充たされていたはずだった。

それでも、弘樹は外に足を運んだ。

酒に音楽、女たちの嬌声が心をくすぐり、香水が心を迷わせた。

自然とそうなったのだろうか、酔いも手伝い一夜を共にした女もいた。

それは好奇心だったのだと思う。

はるかとは知り合ってから初めての女性だったが、なぜ彼女と、というようなものはなかった。

ほんの気まぐれ、乗り越えられる障壁は低かった。

ただ、行かなかった。

勃起はしていたが、うまくいかなかった。

感じなかったんだ。

ひとしきり動いていたが、それにも飽きてシャワーを浴びた。

それでも、やはり浮気なんだろうね。

そのままホテルを出てきた。

弘樹ははるかの前でそんなことはおくびにも出さなかった。

追及されたらどうだったのだろう。

たぶん彼はしらを切るような気がした。

あんなこと起こらなかったんだ。

そう思っている自分がいて、また嫌な気がした。

でも、はるかは、だから誠実であるのかもしれない。

自分の行動の責任を取ろうとしているし、たぶん説明もするのだろう。

その方が人間らしいやり方なんだろう。

自分がひどく嫌な奴に思えてきた。

それが自分の性格なんだ、と居直るように彼は考えた。

はるかは弘樹にとって完璧な女のように思っていた。

どんな女よりも素敵だった。

今でもそう思い、崇拜しているかもしれないが、彼女も生身の女だ

った。

欠点も、粗も見えてくる、
というより欠点を見せない態度に欠点を見た。

完璧であろうとすることに、耐えられなくなってくるのかもしれない。
い。

どこか、息苦しいのだ。

自分ってなんだったんだろう。

はるかにとって弘樹は何だったんだろう。

彼にとって彼女は。

生活に飽きてきているのかもしれない。

今がどんな幸せか、弘樹は実感していないのだ。

そしてそれが、ひどく脆いものであることに気づいていなかった。
そのことで手痛いしっぺ返しを受けることも。

彼は底なし沼の淵を巡っていた。一風吹けば、足を滑らして転落するだろう。

弘樹は自分がひどく疲れているのを感じていた。
なぜ、こんなに気だるくて無気力なんだろう。
それは今まで感じたことのない重苦しさだった。

どうしてこんなに辛いのだろう。

重力に押しつぶされていまうような圧迫感と、内部から起ちあがってくる嫌悪感がお腹のあたりで蠢いていた。

そのくせ背中では悪寒のようにひどく冷えて震えてくるのだった。

甘えていると自覚しても、はるかの温もりが欲しかった。

そう思ったとたん、いやいやと否定してくる感情があった。それは強い否定というわけではなく、手を振って尻込みするようなものだった。

いったん少し遠慮しておこうみたいな、どっちつかずな態度だった。

けっきょく、と何度か呟いたように元に戻ってきてしまう。

自分はいったい何をしたいんだ。

そうなると余計にまた徒労感が襲ってくるのだった。疲れてもう動けなかった。

頭をうなだれて、目を閉じた。

万事休す。

もうどうしようもない。少なくとも今日はもうダメだ。

酒でも飲んで寝てしまるのが一番いい方法なんだ。

この気分を持ち抱えていることはできない。

倒れてしまっんだ。

そんなことを何度も思いながら弘樹は寝入ったようだった。

朝起きると、気持は持ち直していた。

なんだか力が湧いてきて、自分に自信がでてきた。

少なくとも何か処理はできそうな気がした。

現実的に何ができるのか、考える余地が生まれたのだった。少なくともそう思い込もうとしていた。

停滞

少なくともそう思いこもうとしていた。

そうすれば、歩を進めることになるのかもしれない。

今まではショックが大きすぎて、それを塞ぐように心理が動いていた。

現実には解っているのだが、それを認める部分が抜けているのだった。ボールが投げられているのだが、それは身体を素通りしてしまう。

捕るなり、逃げるなり、何かするような反応にならないんだ。

そしてできるだけ衝撃を和らげるように身をかがめている。

そしてそれは身体をすり抜けてしまう。

はるかに会わなくてはいけない、と感じた。

そう思うまでにずいぶん時間を食ったことになる。

本当ならもっと先まで逃げていたいんだ。

ずっとこのまま眠っていたいんだ。

そして塩をかけられたナメクジのように溶けてしまふんだ。

まだはるかを手放したくない、というような下卑た感慨が起こってきた。

はるかの身体が実感を持って甦ってくるのだ。

手なれた悦びが肌を粟立てる。

ぞくぞくとして勃起してきた。

どこかで倒錯した気持ちが生まれたような気がしていた。

松本さんは、よく弘樹を誘ってくれた。

なじみの店があつて、彼はひとりでも行くのだが、いつも一人は彼の中では許せなくて、たぶん、そのために誰かを連れて行った。弘樹が誘いやすいのかもしれない。Mという女の人が彼のひいきで、長い付き合いだと言っていた。

彼女はすいぶん年上に見えた。松本さんは40歳ぐらいで小学生の子がいる。

松本さんは金ばなれが良くて、給料だけではやっていけないように弘樹には思えた。

部署には接待費や取材費のようなものがなかった。だから自腹で飲んでいることになる。

なぜそんなことを言うかといえば、弘樹にお金を払わせなかったからだ。

いつもニコニコしていて楽しそうだった。

弘樹は社会勉強をしていることになった。

ただ、彼の回りにはバリアがあつて、容易に寄せ付けられない何かがあった。

それは若さゆえの構えだったのかもしれない。

なんだか面白くなさそうな顔して飲んでいるのね、と直接言ってくる店の子もいた。

心底酔いきれない、自己規律だった。ただそれも酒が回り切るまでだ。

酔いが進めば、気持ちが緩んで船で大海に行くような気分になった。酒に酔うタイプはいろいろあつてそれを観察しているのも面白いものだった。

自分も酔ってくるのだけれど、観察している時間が人より多かったのだろう。

たぶん弘樹は酒が強く、容易にその状態になることは少なかった。

酔っ払って自分をなくしてしまうことにまだ嫌悪感があって、抵抗していたのかもしれない。

クラブといういろいろな意味で使う。それによって年代がわかるかも知れない。あまり分らないから特定するため、それになんか付けなくてはならない。ただディスコクラブはクラブと平坦なアクセントをすれば通じる。

キャバクラは、キャバレーとクラブをくっつけて省略したものと思うが、それだけで形態が特定できることになる。そのように命名されていくのだろう。

弘樹が連れて行ってもらったのは、こんな店が今でもあるのだろうかというぐらい広いところだった。ビルの、イメージ的に言えばデパートのワンフロアをぶち抜いたような空間だった。

そしてその中に、人がいっぱいいて、皆楽しそうに歓談しているし、先のフロアでは踊りをしている人がいる。たぶんそのために衣装を選び、練習を積んできたのだろう。

そこにはスポットが当たっているが、他は柔らかな照明でぼんやりとした翳のようになっていく。

ざっと見ても、2、3百人はいそうだった。もっというかな。グラウンド・キャバレーと呼ばれるものだろう。

ここに一人で来るのはやはり気後れしそうだった。

席に着くとすぐMさんが来て、連れてきた若い女の人とお酒を作ると、失礼みたいな感じで、どこかへ行ってしまった。

たぶんこの間が持たないこともある。

マイクでは、だれ誰さん何番テーブルへというようなコールがひっきりなしに入っている。

会話はあまり二人の間ではなくて、隣に座った女の子とポツリポツリ話す。

このトークが稼ぎのもとなんだと思う。

もちろん好みの子が座ればそれだけで満足なんで、だから指名をするということになるんだけど、奢ってもらっている状況もあって弘樹は指名などしなかった。

ただ、MさんとそのAとかHはチームというほどではないんだけど、ヘルプに入ることが決まっているように見えた。年齢が近ければ代わり番ということにはなるのだろうけれど。

だから何度かに一度は、あるいはその日のうちに一度は席に来ることになる。

たとえば、ゆつくりその子と飲みたいと思えば、時間を買わなくてはならなかったのだろう。

ここでは時間が金を生み出していた。

そのために、肌を磨き、髪をセットし服を買い、その日の服や装飾品を選んで出勤することになるのだ。

Sは中国の留学生であると言った。

ドレスを着て、それはじゅうぶん似合ってはいたけど、どこか借り物のような気がした。

言葉はたどしくはなかった。

語彙は少なくとも何度も会話をしてきた安定感があった。

クラブとは飲食の接待をされるということが、条件なんだろうか。

接待する従業員がいるということになる。だからそれが男子ならホストクラブになるわけだと思う。

風俗系に進めばテレフォンクラブ（テレクラ）とか、出会い系の前の形態なのかもしれない。

もともとクラブということばは、社交的な組織があって、

その意味で今使われているのはマージャン倶楽部かな。
カントリークラブと言えばゴルフ場だ。

夜の社交場的な意味合いで、ナイトクラブができたのだろうか。
もともと酌婦を使って接待するというものは東洋的な発想、習慣な
んだと思う。

だから英語のホステスは家庭の主婦ということになる。

この接待というのは難しいんだろうね。

自分がホストになったと考えればいい話で、出来るなら遠慮したい。
でもあっている人がいると思う。

そういう人がその店のナンバーワンになるのだろうか。

弘樹は、酒を飲み周りを見回し、どうでもいいことを考えていた。

飲んで帰ってきて、ごろりとそのまま寝てしまえば、

少なくともその後の時間について悩むことはない。

そのために正体不明になるまで飲んでいるのかもしれない。

そうなってしまうば、ろくでもないことを考えないで済む。

そんなときに考えることは最低のことだし、

まして次の日になれば覚えていない。

酔って誰かに会いたくはなかった。

そう考えているうちはまだ本当に酔ってはいなかったらしい。

次の日は覚えていないのだが、どこかの店に寄ることがあるらしいか
った。

まだ飲み始めに訪れた店で、

露骨に嫌な顔をされたり、にやにやされることに気付いた。

この間は、ご機嫌でしたねとママさんに言われたりした。

この間っていつだ、と思うのだけれど思い出せはしない。

あ、そう、とか言ってごまかすしかなかった。

いつだか、玄関のドアに入ったつもりで通路に寝ていたことがあった。

日がかなり高くなるまで寝ていたから、その階の人にだいぶ見られたかもしれない。

それはたまたま一回の汚点ではあるけど、それに類することはかなりあった。

自分が酔っている間に何をしでかすかについて、

ひどく不安に感じてはいても、飲むことを止めることはなかった。ただ、飲酒の運転だけは止した。

その責任がとれそうもなかったからだ。

それに自分が喧嘩をするタイプでないこともわかった。

それは多くひとりで飲んでいるせいかもしれない。

近所によく行く居酒屋ができて、

そこで酒を飲むのだが、そのつまみが食事代わりになった。

はるかともよく行っていて、

以前から仕事が不規則だったので外食は多かった。

高級ではなく、それほど値の張ることのないおいしく小綺麗な店を探した。

二人のときはかなりの量を食べたはずだが、それが少なくなつて酒の量が増えた感じだった。

部屋に帰ってすぐ寝つけないことがある。これが最悪な状態だった。いろんな音がする。

なまじ静かなせいで、ちょっとしたモーター音とか、

遠くを走る車の音などが気になった。

頭を押し付けてくるような気がした。

さらにたぶん周波数が高かったりして、

聞こえないはずの音も耳を震わせてくる。
静かさの振動が鼓膜を刺激してくるのだった。

そのまま気が遠くなりそうなくせに、
指先の鈍い痛みのように伝わってくるものがある。
それが、眠りを妨げているのだった。

「冬のすみか」

遅番の日以外はその居酒屋に行くことになった。

はるかのところへは行こうと思いつながら、踏ん切りがつかなかった。行こうと思うまでの決断までも時間もかかったが、そうしようと決めてからも時間が経っていた。

はるかからの連絡を待っているのかもしれない。

流れとしては、待ってて、と言っているのははるかだった。

でも、そのことにこだわっているわけではない、ただずるずると時間が流れているだけだ。

気持ち的には、はるかが長期の出張に出ている、帰りを待っているかのような感覚だ。

「冬のすみか」は母親と娘でやっている店だった。

料理は主に子供の方がやっていた。子といっても40歳は過ぎているのだろう、ほとんど厨房に入りきりだった。

この人目当てにというほどではなくても、そんな感じで通っている客もいた。

弘樹はほとんど黙って飲んでいて、トイレの手前に小さなテレビがあつて、客が入るとだいたい消されていた。

カラオケがなくて、クラシックやジャズの有線が流れていた。入り口近くに座敷の席があつてあとはカウンターがエル字形にあるだけだった。

酒を注文すれば「お母さん」70歳に近いのだろうか、そう呼ばれていたが準備をした。「ママ」と娘の方は呼ばれていたけれど、少し挨拶に出て、注文の料理のために奥へ行ってしまう。

火を使う台が奥にしかないせいだった。魚をさばいたりカウンターのなかでやっていた。

弘樹は空いていれば奥のカウンター席に座った。

酒はそのときの気分で飲んだ。ビールの時もあれば、冷酒、ワインを最初に飲んで、焼酎やウイスキーの水割りにすることもあった。

「何にします」と聞かれて、その時浮かんだものを注文した。だいたいの傾向はあるのだろうが、分析したことはなかった。

そこはお通しというのが出てこないの、お勧めを頼んでおく。そうしない最後まで何も出てこない。

コツは最初に頼んでおくこと、混んでくると忘れられることもある。ハッキリ言って素人で、料理のうまい家庭の主婦的感じなので要注意。

こちらの方で、段取りしとかなないといけないと気付いたのはだいぶ後だった。

何がいいかと言えば、これでやっていけると心配するほど安いことと、料理がうまいこと。欠点はすべてに遅いこと。時間が押して人は無理。せっかちな人もNG。

みんなが何かを待っている状態なので、隣の人と話したりする。

年齢層はかなり上で、弘樹が一番若いぐらいかもしれない。

ママさんは誰にでもあだ名をつけてそれで通すからみんながその名で呼び合うことになった。

弘樹は「次郎吉」だった。

ご存知、鼠小僧だ。正体不明なところからの命名らしい。

「次郎吉さん」と隣の席の人に呼ばれた。

今日の隣は「殿」だった。

ありがちだが、南部・盛岡の藩士の末裔らしい。

飄々としているが、酔うとくどい、最後うまい具合に居眠りをする、ほとんど日本酒を飲んでいる。

歴史と将棋が好きで、よく研究しているが独特の見方がある。時々ネコさんと座敷で将棋をしている。いい勝負のようだ。

情報が弘樹の頭の中をよぎっているのだろう、意識しているわけではない。声をかけられる前の段階から、たぶん隣の席に座った時に感じているはずのものだった。

今日は少し春めいた陽気になってきていたので弘樹は生ビールを頼んでいた。それを二口飲んで、ジョッキを置いたときだった。たぶん間合いを見計らっていたのかもしれない。

まあ、不意にそう言われて右横に首を傾けた。

「いやあ、昨日酒気帯び運転で捕まったんだ」

なんだか他人事みたいに、前に向かって呟いた。右手には冷酒のグラスを持っている。

だいたい毎日飲んでいる人は自分の酒量が決まっている。前後はするけど基本線はいつも同じだ。自分の酔い方を模倣していると言っている。酒を飲むスタイルはどこかで決まっている、最初にしたセックスを模倣するみたいだ。

まだ時間も早いし彼は正気だった。

ひどく酔っている人とは弘樹は喋らないことにしている。酔い方がわかるくらい知っている人なら別だが、下手に関わると碌なことはない、と学習していた。話しかけられても答えず観察するだけではない。檻の中の動物みたいだ。絶対手を触れてはいけません。

その人はその人の時間を過ごしているので、次の日覚えていないようなことに関わってはられない。

たぶん自分もそんなふうに思われていることがあるのかもしれない

な、と思う。

ひどく恥かしいが、それも自分がしでかしたことだ。

弘樹は両手を広げた。

ちようど息を吐いたところだったので、言葉が出ないだけでそのことに意味はない。

続きをどうぞ、みたいな意思表示だろうか。

何か言うとしたら、へえ、そうなんですか、だろうか。

「都心で用があつて飲んで電車で帰ってきた。知つての通り駅から遠いので車を駅の近くに置いていたんだ。もともとそれに乗って家へ帰るつもりだった。酒気帯びの罰金が重くなつたのも知っている。でも三十年近くそうやってきたんだ、一、二度捕まつたことはあるがスピード違反よりは少ない。車で仕事をしてればそれは税金みたいなものなんだよ。大きな事故なんか起こしたことはない。酔つていれば車の運転はしない、そこで寝ていくんだ。そうやってきたんだ」

彼は流暢に話すタイプではない、東北人の朴訥さというのだろうか。大柄で顔の長い、鬚を結えば似合いそうな顔つきだった。

そこまで聞く間に弘樹のジョッキは空になっていた。少し考えたが、もう一杯注文した。

彼が何を言いたいのかはまだわからなかった。何かを言うまでにいるんなことを考える、あるいは条件を設定するようだった。だから弘樹は黙って聞いていた。

そこで、だからどうなんですか、みたいな言い方をする人には彼は話しかけないようだった。彼は自分の言いたいことがあつて、それを黙って聞いていて、その反応を素直に言う人を望んでいる。素直に言う、ということに関しては素面の時だけと限定しておいた方が

いいかもしれない。酔うと、ある程度は皆そうだけれど、自説を曲げなくなる。

ただ、感情に触れる話をしているわけでもないのだから口論はしても喧嘩になることはない。議論好きといえるのだろうか。

彼は弘樹が話を聞いていることがわかって、酒のピッチが速くなった。

酔うというのは、一種の状態だから最初お酒がうまいとか感じてても酔っているわけではない。グラス一杯で酔う人がいる。この人は感度がいいのだから他の人の基準にとらわれてはいけないのだと思う。グラス一杯をゆっくり飲めばいいのだけれど、なかなかそうはいかない。

利き酒というのは、そんなに飲まないというより、口に含むだけのようだ。酔ってしまったら味覚も鈍るのだろう。

でも味覚を犠牲にしても酔いたいのだった。ピッチというのはそういう意味だ。酔いを感じるまでは、あるいは一定の状態まではピッチが速い。ビールをいつも飲んでる人が冷酒をそのペースで飲むと、つぶれてしまう。アルコールの血中濃度の問題なのだ。

殿はその話をしていた。

「血中濃度の基準が下がって、今まではセーフだったのがアウトになったんだ。だから次の日でも引かかる例が増えた。営業車は朝の点検が義務付けられているから夜の飲酒も早く切り上げなくてはならない。車に関しては禁酒法の時代に向かっていっていると言っている。タバコも同じだ」

ここまで弘樹は一言も話していない。

ようやく、注文の品物が来た。スズキのカルパッチョ。

「酒税が変わったせいなのだろうが洋酒がひどく安くなった。ふつうはそちらの需要が増えるはずだが飲む人がほとんどいなくなった。どうしてなんだろう」

殿はほとんどひとり言のようになっていた。

ネコさん登場。

みんなに挨拶して殿の隣に座る。

ネコさんはたぶん金子さんだろうけど、最初に店に入ってきたときからネコさんで通っていたらしい。近くの工業団地にある会社の部長さんでギャンブル好き。ちょっと高い声で、座を仕切るのは名人なんでこの人が一人でこの店に来るかが不思議だったが、単身赴任のため弘樹と同じような理由で毎日やってきていた。

必ず何かの話題や、品物を持ってきてカウンターにいる人たちを巻き込んで会話をする。それが心から楽しそうなので感染する。今日はコインで削るくじを買ってきたと言って、みんなに配っている。当たった人には半分プレゼント。これはどんなからくりがあるのだろうか。まあ、みんなへのお土産としておこう。もらった人が喜ぶことは間違いない。でも実際はもらってるわけではない、後で回収するわけだから。

「いつものセットで」

この人は好みがうるさいのかもしれない。贅沢とは違うのだけれど、いつものセットは焼酎の水割りにカットレモンを入れ、さらに時々絞っている。

弘樹の皿を見て私もこれと同じもの、と注文していた。

そう言えば殿は干したコマイをつまんだ。彼は酒の前に軽く食事をするらしく、料理らしいものは頼まなかった、せいぜい刺身かな。

あるいは一軒目にどこかに寄ってくるのかもしれない。

殿は駅から離れてはいるが、敷地にアパートを建てそちらだけで暮らしては立っているようだ。詳しくは聞かないが最近勤めを辞めたようだった。

「殿が、酒気帯び運転で捕まったそうですよ」
ひと段落騒ぎが収まったところ、弘樹はネコさんに話を振った。

殿が続きを話したそうだったからだが、一応は情報を与えておいた方がいい。

ネコさんは「ふうん」と興味を示しながら殿の顔を見る。
殿はどこまで話したかな、と確かめるようにしてから頷いた。

「酒気帯びの基準がきびしくなつて、以前なら違反でないものまで取り締まるようになった。それ自体が問題で、アルコールの血中濃度を一律的に取り締まるということだ。酔っているという状態とは関係なくなつたんだ」

「でも、酔ってるかどうかはかなり主観的じゃないのかね」と、ネコさんは独特の調子で口を挟んだ。
当然、彼は酒を飲んで車を運転などしない。

ただ、非難しているわけではなかった、話が好きなんだ。

「まあ、お上の都合ということでしょう。実は私がおかしいと感じてるのはそのことではないんですよ」

と、殿はその議論を微妙に避けた。勝ち目がなさそうだからだろう、どこかで線を引かなくてはならない。

「私が気がついたとき、もうパトカーは後ろに付いていたんですよ」
殿は辺りを見回すような感じで、一呼吸入れた。自分の言葉の効果を測ってるみたいになだ。

「それから徐ろに赤色ランプを点灯させて、前の車停まりなさい、とやったんだ」

「一斉じゃなかったんですか」

これは弘樹が発した言葉だった。てっきり飲酒の検問に引っかけたと思っていた。これは、予告され定期的にやられていた。

「それなら、解っているので時間や場所を避ければいい話なんだ。そうじゃなかったんで驚いているわけさ」

「そんなにふらふらしていたのかね」

至極もつともな感じでネコさんが訊いた。

「そんなはずはない、自分では、酔っている自覚もない状態なんだから」

「そうすると、どういうことなんだろうか」

「そこが不思議なところなんですよ」と殿は空を見上げた。

「初めから目をつけられていたんですかね」と、弘樹はしびれを切らす感じで呟いた。

殿はちよつと左手をあげて、話を続けた。

「こちらが停車すると、前にパトカーを停めて警官が一人降りてきた。もう一人は車に残ったようだった。窓を開けさせて、お忙しいところ済みませんが、どちらへ行かれますか、と訊いてきた。答える義務もないけど、まあ家へとあまり口を開けないで言っただ。呼気に酒が交じるだろうということは自覚していた。そうすると警官はどうも酒の匂いをするんですが、お酒飲まれましたかと尋ねてきた。少し口ごもると、何か合図をして助手席からもう一人のおまわりが降りてきた」

そこで、殿は遠くを見るようにしてグラスを乾した。

「それから段取り通りという感じで、最後に書類にサインをして放免された。ただ車の運転は出来ないので、駐車場まで送ってくれたよ。路肩に置いておくわけにもいかないからね。サービス満点だ」

「で、罰金はいくらなんだね」とネコさんが訊いていた。

「30万」

「大した金額だな」

それで、話は終わってしまった。殿は自分でその話に興味を失ったみたいだった。そこからネコさんが何か言って、二人でぼそぼそ話した。

弘樹はそれには加わらないで別のことを考えていた。最近いつも同じことだ。

思いついてメールをしてみた。しばらくぶりかもしれない。

——いま、家の近くで飲んでいるんだ。何してるの？

なんとなく人懐かしくなっていたのかもしれない。返事は期待していなかった。

たぶんもう仕事は終わりがけで帰る支度をしてるころかなと思っていた。そのまま帰れば三十分もかからないで戻ってくるだろう。メールの着信音が鳴った。はるかからだった。

——いつものところ？

これが会話といえるかは判らないけれど、少なくともはるかが出ていつてから初めての質問だった。

今までは拒否の言葉しか聞いていなかったから、ひどく新鮮だった。

——そう、「冬のすみか」。相変わらずだよ。

それからしばらく携帯電話は鳴らなかった。

ポケットから出して、空の灰皿に置いた。

キープしてあった麦焼酎を水割り飲んで、自分の中の定量が終わった。

帰らなくてはいけない。

会計をして外に出たとき、メールの着信があった。

——涼しくなったね。

はるかが出て行ったのは、8月の終わりだったから、もう一月が経とうとしていた。

弘樹は発信のボタンを押した。

今まではるかは一度も出ようとはしていなかった。
着信拒否にはなっていないようだった。

コール音が鳴っている。

「はい」と、はるかの声が聞こえた。

道をゆっくり歩いていた。

学生のころ住んでいたアパートとは目白通りを挟んで反対側になる。
少し思い出が多すぎるな、と感じていた。

はるかとは初めて食事に行ったレストランの先を左に折れた所の賃貸
マンションに住んでいた。

いつか郊外に住宅を買うのだろうか。

はるかはそういうところには無頓着だった。

彼女は違うものを求めている。

それは弘樹が求めているものと似ていたのだろうか。

「やあ、元気なの」

あまり気負わずに話せそうな気がした。

「順調よ、仕事もうまくいっている」

ベンチを見つけてそこに腰を下ろした。暗くもなく照明が眩しいと

いうこともなかった。

適度な夜景、風も心地よかった。

「そう、安心したよ」

本当にそう思った。心配はしていなかったけど、気にかからなかったわけではなかった。

「わたしたち、もう終りなのかしら」

明日は雨かしら、みたいな感じではるかと言った。

弘樹は通りの車を眺めていた。

ヘッドランプが光り、陰が流れていく。運転手の横顔が見える。三台ぐらい眺めていた。

「そんな簡単に終わりにはできないよ」

「そうなの」

「そうさ、話もしないで消えてしまうなんて、ぼくたちにできるわけがない」

「考えてみるわ」

と、はるかと言って静かに電話は切れた。

ツーツーと信号音が鳴って、弘樹は七回ぐらい聞いてから電話を耳から離れた。

それから立ち上がりゆっくり住まいに向かった。

転職

前にバイトしていた書店の店長から社員にならないかと言われていた。彼は今は本社に行っていた。給料が大幅に増えるわけではないが、身分的に安定するし、時間も今よりは規則的になる。それに仕事に対しても不安はなかった。勧められるままに学生時代に本社の研修も受けていたし内部資格も持っていた。反対に言えば、だからなのかもしれない。

「働く気になったら声をかけてくれ」と言われていた。

はるかのことだが、こんなでなければ思いだすこともなかったのだが、その晩、急に思い立った。

次の日の朝、榎田さん、というのが前の店長の名前だったが、その名刺を引っ張り出して電話をした。居ても立っても居られない、という言葉があるがそんな感じだった。勢いをつけたかったのだ。

一度、本社の方へ来てくれということになって、面談の日が決まった。

はるかとはぶん喜ぶだろう。多くのことは時間的な余裕がなかったことに起因している。実は解っていたことだが、その生活に決着をつけなくてはいけないとうすうす感じてはいたんだ。

居心地がよかったわけではなかったのだが、踏ん切りがつかなかったんだ。四日に一度の休みと午後からの出勤で給料が同程度という条件が自分にあつていそうな気がした。時間的自由が自分にあるような気がしていたんだ。それに社会的なしがらみにあまり縛られない環境がだ。

だがそれが原因ではるかとは齟齬が生じている、全部の理由ではないけど。

なんとかしなくいけないんだ。

学校を卒業して四年、その間自分は何をしてきたんだろう。

本を読んだり、文章を書いたりして何かモノになったのだろうか。社会的な評価は望んでいなかったけど、自分の中で何か達成できたことがあったのだろうか。この生活を続けていく意味がどこにあるのだろう。

陸上の選手なら練習してタイムを詰めていけばいいし、野球の投手なら同じところに投げる技術を身につければいい。そんな感じで何かが自分に身に付いたのだろうか。やはり自分に自信がないし、疲れているのがわかった。

とにかく何か自分の中のを動かしてみるしかない、というのがこのひと月の結論になった。

弘樹は堂々巡りのような仕様もない思いにとりつかれていた。ある場所を探していて、地図もあるのに全然見つからないという場合だ。結局、その地図がインチキだった、と結論付ける。正確でない地図は意味がない。解ったことは、その場所は存在するが、どこは特定できないということだった。

架空の場所、ではなくてかつてあって今はない場所。あるいは、かつてあって、今は別のものになっている場所。たとえば、前はやっていた寿司屋がつぶれて、ラーメン屋になっている場合だ。かつそのラーメン屋の位置も定かではない。

なんだかそんなことを考えていたら、少し腹もすいてきた。駅前の立ち食いそば屋にでも行ってみよう。長老とよく行ったな、と不意に思った。みんな何しているんだろう。

そつえば、はるかが海保に会ったとか言っていた。仕事は金融関係とからしいけど、どうだかな。まともなシンクタンクならいいんだけど。

長老や会長がいなくなって、こけしも卒業して「超研」は機能しなくなった。まともがなくなって、自然消滅してしまった。ばらば

らな小さな単位になってしまったんだ。

弘樹とはるかはその小さな単位だった。二人でいつも一緒にいて充足していた。ジョガーは修行の旅に出て行った。海保は怪しげな団体のオブザーバーだったし、卑弥呼はしばらくして会長と結婚したようだった。もう会うことはなくなっていた。

そのあと野球部がほそぼそと「新超研」を続けていた。

弘樹はある程度まじめに勉強して、教授から研究室に残るように期待されたけれどその制度や研究に挫折したのかもしれない。今考えればそんなに頑なにならなくてもよかったんだと思う。まだ自信があったのだけど、目が出なかった。おだてられて伸びるタイプだったんだと思う。とんだアマちゃんだ。

現在、弘樹が陥っている袋小路はだいたいそんなことだったんじゃないだろうか。とある意味、客観的に見られるようになってきていた。いいものを持っていたんだが、生かせなかったな、と感じていた。

もちろん人生はそれだけではないし、遅いこともないとはわかっていたけど。でも何か辛いことだった。それはワールドカップで大活躍してみたかったと同じレベルの願望であったんだ。だから反対に言えば、ようやくスタート地点に立ったと言えなくはない。

ちよつと奥手だな、と自嘲するしかなかった。

「本社」は六本木にあった。もともとそこが発祥の地であつたらしい。今は大きな商業施設になっているビルの中にある。エレベーターで言われたとおりの階に降りると、正面に受付があつて、制服の女性がにこつとした。

要件を告げると、部屋に案内された。

弘樹の勤めている会社は自社ビルで、ワンフロアが先が見渡せないほど広く、天井までの壁はなかった。雑然として空気は濁っていたが開放的ではあった。ここはその逆だった。キレイに仕切られ、エアコンが聞こえない音を立てていた。重厚で凝った照明になつてい

たが、どこか落ち着かなかった。

しばらくして、榎田が思っていた所とは違うドアから現れた。ソファは低く、デスクに慣れている弘樹は姿勢が保てなかった。挨拶のあと、さっそく用意した書類を確認して契約ということになった。連れてきた女子社員が内容についてきびきびと説明していた。幾つぐらいの人だろう、自分より少し上だろうな、と思っていた。言われたままの書類にサインをして面談は終わった。女子社員は引き揚げ榎田はお茶に口をつけた。ひどく円滑でビジネスライクだった。弘樹に不満はなかった。榎田は上司として信頼できる人間だった。とうぜん仕事には厳しいが、それは自分を含めてだったし、見晴らしがよくて細かいことをつくタイプではなかった。いつも頭が一つ抜け出していて、指揮官という感じがした。いつも店長と呼んでいたので、そう言いそうになる。今は名刺によれば企画課の第二課長ということらしい。

「しばらく店舗の方で店長見習をしてもらう。三か月ほどでたぶん新規店の店長をやってもらうことになるから、しっかり準備してもらいたい」

榎田にそう言われて、「本社」を引き揚げてきた。来週からは書店員になるというわけだった。

辞めると決めてからの職場はどことなく違和感があった。改めて考えるとここは姥捨て山のような部署だ。それなりの機能は果たしているのだけれど、それに従事している人に覇気がなかった。すこし内情がわかってくると、リハビリセンターのような気がしてくる。校閲課というわけで課長はいても他のポストはなくて、社員も嘱託もアルバイトさえ同じローテーションで動いていた。それに時々課長もだった。

最初の課長は交通事故で2年ほど職場を離れていた。その次の人は3カ月しかいなかった。その後釜はひどく神経質で鉛筆をいつも削っていた。それから今の課長なのだけれど、この人はひどく気を使

う人だった。弘樹にもそのまんまのお世辞を言ったりして、どこか変な感じだった。いつも愛想笑いをして、「あー、そう」というのが口癖だった。

弘樹が辞めたいのですが、と切り出した時もやはり最初「あー、そう」と言った。それからローテーション表を眺めていた。たぶん自分が休みの取りたい日に入っている弘樹の出勤予定を見ていたのだと思う。4年勤めた部下が辞めるときそのぐらいのことしか考えないだろうということは予想がついていた。

「急で困るんだよね、何とかならないの」

何か不都合があったようだった。

「済みません、お願いします」

弘樹も余計なことは言わなかった。もう決まっていることだった。

「あ、そう」

今度の「あ」は、語尾が伸びなかった。

それで退社が決まった。嘱託員の人事は課長の職権だったから、何の問題も手続きもいらなかった。今週の出勤をこなし、賃金をもらっておさらばだった。よく飲みに誘ってくれた松本さんも急に異動していた。お別れ会をやるような同僚もいなかった。

そう考えると閉ざされていたんだな、と感慨が起こる。

弘樹は何のりハビリをしていたのだろうか。

帰りの地下鉄の中で、ひどく憂鬱になった。今そんなことを訴えれば、すぐうつ病だ、と断じられてしまう。ストレス障害は確かにあるのだろう。そのためには時間が必要であることは誰でも知っていることではないだろうか。失恋でも交通事故でも後遺症はある。何とか克服していくしかないのだろう。それがりハビリの意味であるかもしれない。でもハッキリとは自分が何に悩んでいるのかも弘樹にはよく分からない。

絶望なんだ。と言うとまた大げさではあるけど、そういうことなんだと思う。生きること、というより自分を含め人間に絶望している。

人間であることが嫌なんだ、嫌いなんだ。

「人間失格」という言葉があっただけ、失格してるのは人間なんだ。では、どうすればいいのか。

それを考えると胸がキュンとしてくる。ときめいているのではなく、縮んでくるんだ。

止まりそうになるのはびっくりしたときで、この場合不安で倒れそうになる。

なにかに頼らないでいることができない気がしてくる。なんとか中毒にならなくては、いられない心境なのだ。その不安から逃れるために、アルコールであったり、ギャンブルに走る。セックスでもいいのかもしれない。また仕事や研究であったりもするのだろう。没頭している間はその不安から逃れられる。もちろんそれではダメだから、避けてはいるんだけれど。

ただ実際頭の中では、人類が滅亡しても弘樹は困らなかった。そうすればひどく自分が冷血漢に見える。敢えて殺人者になろうとは思わない、だとすれば弘樹が守っているのは法律ということになりかねない。小市民だからだ。暴力もひどく苦手だった。

ただ日本が滅んでも構わなかった。それは多くの滅んだ民族の怨念であるかもしれない。それより隕石が地球に衝突したりして地球そのものが破壊してしまうかもしれない。

本当のところは弘樹には何もやりたいことがないんだ。存在の理由ということではなくて、人生の意義が見つからなかった。何をやってても面白くない、ということではなくてそこそこ面白いけれど、ちよつとした隙間を虚無の風が流れていくんだ。その底は深くて、乗り出せば怖くて覗きこめそうにもなかった。だから弘樹ができることがあれば、それはその淵を探索してみることなのかもしれない。けれどその踏ん切りもつかなかった。

それこそ今、反対の方向にハンドルを切ったのかもしれない。シジフォスの例えのようにだろうが、無益で希望のない労働の方にだ。書店の朝は早くない。駅の構内のような場所をのぞけば、10時こ

る開店するところが多い。どちらかと言えば夜型と言っているのかもしれない。深夜までやっている店が増えてきていた。書店にとつての競合がコンビニと図書館であるからだった。

通勤ラッシュの車両とは反対の電車に弘樹は乗り込んだ。始発だから座って通勤できた。書店とは言うが、雑誌というくくりで言われる本が売り上げの半分近くを占めていた。明らかに書籍の販売業は斜陽だった。ただなかりはしないだろう。今廃業しているのはよく町の本屋さんと言われている、小規模の店だった。

繁華街の図書館のような大規模な店舗と、郊外店のようなロードサイドの売り場100坪ほどの形態が主流になってきている。この郊外店が弘樹の職場になった。

営業時間は10時から夜11時まで。店長か社員が最後レジの精算をして退店することになる。夜間金庫が近くにあればその日のうちに、なければ午前中に銀行に行つて本部に送金する。多くの店で店長と一人の社員という体制になる。あとはパート、アルバイト。種々の作業は彼らがやることになる。検品、陳列。販売等マニュアルがあるのでそれに従つて行われる。

社員は店長の補佐だから、強いて言えば副店長、よく銀行などでいう代理という職名に似てるかもしれない。こちらは全体の売り場管理、仕入れ・販売分析、人事と多くをこなさなくてはならない。M支店の店長は、四〇代なのだろうかベテランだ。本社採用の人であれば三〇歳前後が店長の年齢だったから、中途採用ということだろう。会社は例外を除けばすべて直营店だった。

弘樹は榎田の下で働いてきたから、マニュアルは徹底的に叩き込まれた。ありがとうございます、の声が小さいと特訓までやった。それに本社の研修は図書館司書のような内容を含んでいるからかなり頭でっかちになる。現場と乖離するところもあるかもしれない。この店長から学べるところがあるという榎田の判断だろう。店長は杉山という名だった。挨拶がすんで、指示を待っていると、出勤してきた女の人に「ロッカーとか店内ルール説明しておいて」

と頼んだ。弘樹はその渡辺という人から説明を受けた。年は少し上だろうな。

「店長って怖いのに」と事務室の奥に入ると弘樹は訊いた。

杉山は話している時は笑顔だけれど、黙って何かしているとキツい感じがする。

「そんなことないですよ、仕事没頭してるときありますけど」と、渡辺はにこにこして答えた。

たぶんパートの人なんだろうなと思っていた。

「渡辺さんは長いんですか」

「この店、開店の時からだから六年になります」

一般的に二、三年で店長、社員は移動するから店採用のパートの方が長くなってくる。今日は社員は欠勤だった。シフト表を見ればわかる。店長の下、二番目に書かれた桜井のところが空欄になっていた。

ロッカーは備品などが置かれた棚の隣にあった。新調の制服を支給されていたので、それに着替えることになる。前のとは色が違う、少しデザインも違うのだろう。

「共有ですので私物は置かないようにしてください、というより上着をかけるだけと考えてください。貴重品は身につけておくこと。携帯はマナーモードで、勤務時間内の通話は厳禁です」

説明し慣れているのかもしれない、淀みなく説明は続いた。ほとんどはマニュアルに書かれていることだったが、店によって違う部分は少しあった。ロッカーは男女別、従業員五人に一台見当になる。だから大体三、四台並ぶことになる。労働基準があるので、ここが休憩室にもなる。椅子があって灰皿が置いてある。これは店長の裁量だった。禁煙にすると外で吸うことになる。と、そこでも不都合が起こる場合がある。それなら換気してロッカー室で考えるのだろう。弘樹もしばらく吸っていたことがあるから、わからないではなかった。

二、三日して、早番の帰りに居酒屋に顔を出してみた。遅番の日は週に二日ほどで昼からの出勤だった。それでも終電には余裕で間に合うから、ほとんど毎日タクシー帰りの夜勤とは違った。

ガラス戸を引くと半分ぐらい席は埋まっていた。イスの後ろをかき分けるように進み、所定の位置に座った。

「いらつしやいませ、あら、お久しぶり」

ママはニコニコして声をかけた。こぼれるような笑顔というのだろうか。

「ああ、仕事変ったんだ」

「あら、お昼間狙い？」

あだ名が次郎吉だからだ。

「まあ、そんなとこさ」

「何になさいます」

注文をお母さんに伝えると、奥に引つ込んだ。

ビールをいつもの感じで飲んでいた。隣は八木ちゃん。弘樹は仕事の話とか会社のことを話さないけれど、多くの人はそのことがメインで、反対にそれ以外興味の無い人がいる。それはいいんだけど、人にそのことを話さなくてもいいような気がする。仕事の話は会社ですればいい、と考えているのは弘樹が日本のやり方をよく知らないからなのだろう。

会社の連中と酒場に来て、仕事、というより噂話とか不満を発散させている人たちを見るとげんなりする。八木ちゃんは逆だ。できるだけ仕事から遠ざかろうとしている。たいていはスポーツ紙を読んでいる。それを話題にすることが好きだ。プロ野球の話とかサッカー、ゴルフなんでもいいみたいだ。とても穿った見方をする。彼は彼なりに報道を分析して、独自の観点から評価を下しているのだ。へえ、そうなんだ、ということもあるし、それはないだろうということもある。彼は今、スポーツ紙に没頭しているのでとても静かだ。時々サワーを啜っている。

弘樹はふつうとても無口だ。電車に乗っている時、喋らないように

自分から話すことがあまりない。気が向けば止まらないで話すこともあるのだけど。

彼は、今もしはるかに手紙を書くとしたらどんなものになるだろうかと考えていた。

ごぶさたしています。お変わりないですか。
元氣にお仕事、励んでいられると思います。

ぼくの居場所はもうなくなってしまったのだろうか。

最近そんなふうに感じています。

きみが望むのなら、離婚の手続きをとった方がいいような気がします。

もうぼくの手から離れてしまったのではないだろうか。

そうでないと言い切れる自信がぼくにはもうないのです。

別れ、というのは母の時に経験しましたが、ひどく辛いものです。でもまだ二人は若いし、やり直すこともできます。それにいい思い出も持っています。それを壊してしまうようなことはしたくないのです。

このままにしておくことはよくないと思います。

弘樹は電話で長く話すことも苦手だった。要件をすっきり言ってしまうばそれで用は足りた。ただ、感情に訴えなければ、というような働きは理解していた。はるかに遠慮していることはないのだが、今一つ、はるかがどう感じているのかがピンときていなかった。愛しているけど別れます、というようなことは弘樹にはよく分らなかった。それはよく言われた、「行動が思考を表している」とい

うことを信奉しているせいなのかもしれない。どちらの愛を選ぶか二者択一のケースがあつて、選んだ方に愛があつたということだった。

そのように人は人生を選ぶのではないだろうか。そして選んだことに責任を持たなくてはならないし、結果を引き受けなくてはならない。それがひどく簡単な弘樹の人生哲学だった。

それで弘樹は結婚を選択したのだろうか。

これはひどく言い訳めいてくるが、弘樹にはその意識がなかった。ある意味はるかにもなかったのではないだろうか。恋愛感情の結果、同居しただけだったのではないのか。お互い一緒にいる時間が長くて、楽しい幸せな時を過ごした。それは結婚を維持していく原動力にはならなかったのだろうか。

考えただけで、当分は出されない手紙だった。

戻ってきてくれ、と土下座してでもその意思を出せば、何かが変わるのかもしれない。なにかを感じてくれるのだろうか。

トラブル

そのあと一月ぐらい経ったころのことだった、その日は弘樹が早番だった。

裏の事務所のカギを開けて入ると、もう日は高かったが、彼岸を過ぎて風が少し出てくるのか、夏の日のもわあとした湿った熱気はもうなかった。

それでもまず空調をいれる。本来なら窓を開け放って換気をしたかったが、それは禁止されていた。「超研」の部室でもやっていたが、窓を開け放つのは弘樹の好きなことだった。

机の上に日報があった。

仕舞い忘れたのではなくて、読んでくださいというように置いてあった。昨日の遅番は店長ではなく桜井の担当だ。

照明を入れ店内を一巡してから、その日報を手にした。

9月28日（水）

22:16ごろ、レジでバイトの水口とお客さんがもめているので、様子を見に出て行った。レジの順番が違うというので、お客さんは強硬に抗議していた。

水口は謝っていたが、納得するようではなかった。

それで私からも謝罪したが、聞こうとしない。

声も大きく、他のお客さんにも迷惑なので、事務所で話を聞くことにした。

レジでの扱いが悪く、店員の教育がなってない、と今度は私にクレームをつけてきた。

それでも、

「申しわけありません」と謝ったが、納得せず大声で非難し、机をたたかンばかりにするので、理不尽と思い

「暴れるなら警察を呼びますよ」と言った。

すると、「呼んでもらわうか」と背を向けて今度は口を利こうとしない。

さらに謝罪したが、動こうとしないので、交番に連絡した。

ハッキリとした意図がわからないし、何かを要求しているわけでもなかった。

ただ、店内でも大声を出していたし、事務所では、そのうえ威圧的でもあったので、

「お客さんとトラブルになり、暴れるので見に来てほしい」と通報した。

珍しく、警官は二人ですぐやってきた。

顔見知りの人だったので、「よろしく」というふうに引き合わせた。型通りの質問をして、おとなしくもしているの、そのまま引き取ってもらった。

帰り際に「覚えておけよ」と捨て台詞を吐いて行きました。

以上、報告します。

一読してまずいな、と思った。

桜井は弘樹より二才若い、まじめで仕事熱心な男だった。ただ少し融通が利かないような性格に見受けられた。たぶん、脅かされて驚いたのだろう。防御的でありすぎたかもしれない。心理的にはそうかもしれないが、実際そうであったのかはわからない。反対に言えば、その男が巧妙であるのか、少なくとも初めてではない気がした。いわゆる、クレーマーではないだろうか。

暴行の証拠的なものはないし、実際手は出していない気がした。どちらにしても、防犯カメラで確認してみなくてはならない。いろいろな場所、角度で十数か所カメラは設置されているが、事務所の中を正面から映したものは無い。まず、レジの後方から正面を撮ったものを見る。今はCDになっているのが多いが、ここのはテープ

のものだった。

一カメ、と呼ばれるメインの装置だった。四、五分前から、テープを回してみる。再生はコマ送りのようになる。多くの場合レジは一台で動いていた。三人目のお客さんが並んだら即座に第二レジを使うというのが、マニュアルだった。店内や事務所で作業中でも、すぐレジに駆けつけなくてはならない。

だれもいなかったレジに、三人連れの学生がやってきて、各々に商品を出している。

その横に雑誌を手に体を揺すっている男がいた。

若い女の人が学生の後ろにとりついた。そのあと、女子の後ろに背の高い男が並んだ。学生たちが去って、レジの正面には女子、横に男というようになってしまった。

男が、レジ台に雑誌を置くのを見ながら、バイトの子は女の人から商品を受け取った。男がなにやら言っているのが聞こえる。

「少々、お待ちください」と言っている。これは事務所の方に向かっているサインでもあった。このタイミングで桜井が出てくるはずだった。

映像は、女子が袋を提げて背を向けるところだった。男は手を振って、怒っているように見える。本は入らないとカウンターに置いたままになっている。

桜井が出てきて、隣のレジを開け、並んでいた客の接客をしている。二人の処理をして、バイトの子と二人で男と話している。さらにお客が来たので、バイトの子が二レジを使い、男の対応は桜井がしていた。

男と桜井は消え、バイトの子が接客を始めた。二人は事務所に入っただろう。

この間十数分だった。事務所の入り口が映っているカメラを確認しなくてはならないが、その前に荷物の仕分けをしておかなくてはならなかった。

一仕事終えて、テープを見たが警官が来たときからドアも閉められ、中はわからなくなってしまった。書類を点検しながらちらちら画面を見ていたが、10分ほどで男が出てきて、続いて警官。最後に桜井が出てきて、後は中のイスを映しているだけになった。

ちようど昼休みの時間になった。バイトの子を食事にやるためにレジに立った。レジの中でやる仕事もいろいろある。客注品のチェックをしていたら時間が過ぎた。事務員らしき人がパラパラ訪れて雑誌を買って行く。のんびりとした秋の昼だった。

バイトの子が戻ってきたので、店長はもう出勤だろうが、交代して昼休みをとることにした。日報とテープを店長の机に置いて、メモをつけた。

「トラブル発生のもうで、日報にテープ確認ください」

これで弘樹がいない間に来て大丈夫だろう。

この件で弘樹にできることはもう何もない。

定期的に憂愁が襲ってくる。何が引鉄になっているのかは分からない。そんなものないのかもしれない。徒労感が募り非常に疲れる。どこかでそれは内臓の思考なんだ、と読んだことがあった。そうすれば心臓だろうか。

重い気分は消化器系に相応しい。胃が痛いような顔の人は想像がつく。寝不足では陽気にならない。目がしょぼしょぼする、だるい。

ただ食欲はあった。ラーメンとチャーハンの定食をたいらげた。消化器系ではないらしい。

実は小学校の低学年まで、ほとんどのものを食べなかった。好き嫌いが激しいというのだろうか、食べたいと思うものがなかった。今考えるとホテルの洋食系の朝メニューのようなものは食べられたのかもしれない。

ただ、そういうものは食卓には並ばなかった。野菜は大根だけしかだめだった。魚もダメ、鶏肉、脂身もダメだった。おいの強いもの、ねばねばしたもの、ぬるつとしたものもダメだった。肉は噛む

だけで飲み込むことができなかった。牛乳をはじめ、乳製品は好きだったけどアレルギーで食すと咳が出た。

その当時の写真を見ると、ガリガリで目だけ見開かれたような顔をして、いつも遠くを見ていた。これは少し仮性近視だったからかもしれない。

ポケットに手をつ込み、身体を斜めにして、目が眩しそうなポーズだ。自分では気がつかなかったけど、はるかがアルバムを見ていて、「弘樹って、赤ん坊の時からホウレイ線があるね」と言っていた。

これが劇的に転換する。

きっかけは何だったのだろうか。林間学校といって、夏休みに泊まりがけで学年全員で二、三泊の合宿があった。そのとき出されたものは全部食べなくてはいけないルールがあったのかもしれない。トンカツが食べれなかった。キャベツはソースづけにして流し込んだ。豚の脂身を噛むことが出きなかったのだ。それで小さくして喉に触れないように吞み込んだ。ほとんど泣きべそ状態だったと思う。

それではいけないんだ、とそのとき急に思った。こんなこととしてはいけないんだ、と決意した。たぶん、かつこ悪いと考えたんだと思う。それになんでも食べないと大きくならない、という脅しも利いたかもしれない。子供心に強くなりたかったし、人に負けるのは嫌だった。

最初はやはり吞みこむことしかなかった。生卵の白身は発狂しそうだった。ご飯に混ぜてぐるぐるかき混ぜているとヌルヌルがなくなることを見つけた。豆腐も同じようにかき混ぜていたら、父親に怒られた。それで仕方なく小さくカットして口に放り込んだ。とにかく出てきたものは食べる主義に変えたのだった。それから弘樹はだんだん大きくなっていった。

対応に付いて、行き過ぎたかなという認識を桜井は持っているようだった。そこに誘導されてしまった感もあるみたいだった。

「どうして警察を呼んだのか、冷静になってみるとよくわからないんです」

誰かと連絡をとるという考えはなかったのか、と店長は訊いた。

「そんな大それたことになるという気はしなかったし、自分で十分片がつくと考えていました」と桜井は答えた。

店長は決して桜井を責めなかったし、嫌な顔もなかった。もつれた糸をほどこうとでもしてるみたいに、ゆっくり経過を聞いていった。

落ち度という意味でいえば、客の男に責任はなかった。あるとすれば、周りを不快にするような雰囲気を持っていたということだろう。クレマーという言葉が頭を回っていた。

桜井に同情はしても、自分ならもつとうまく処理できたのではないかと弘樹は思っていた。虚勢ははっているが気の小さい男に思えていた。もちろんそんなことは言えないし、言っても意味がなかった。問題はこの局面をどうさばくかということだった。どこがどうまづかったのか相手の立場に立って分析してみなくてはならなかった。金品でも要求してくれば、それこそまた警察へ相談ということもあったが、そういう展開にはならないようだった。

桜井が弘樹の部下であるなら、警察を呼んだことの対応を非難していたと思う。そうするべきではなかった、と思うが店長はそのことに何も言わなかった。部下を庇っているわけではないが、対応のまづさを指摘もしなかった。

「本部から何か言つて来るまでこちらは待機だな」

そう言つて、話は終わった。

それから三日経った。

本部と店長での打ち合わせはあったようだが、弘樹の耳には入ってこなかった。早番の日だったが、「ちよつと残ってくれ」と店長に言われた。

「例の人が来るらしい」

駅の喫茶店で会うことになったらしい。弘樹は顔が割れていないよ
うなので、近くに席を取って、監視してくれということだった。

本部から来た北沢という男は、ひどく若く見えた。30歳は越えて
いるはずなのに弘樹と同じ程度には見えた。小柄で優しい顔をして
いるせいかもしれない。

三人で、その北沢と店長と桜井は並んで駅の階段を上って行く。弘
樹は少し遅れて進んだ。彼らを見張っているようだった。

駅ビルの三階の喫茶室に入る。入り口が見える通路側に席を取った。
弘樹はその手前の斜め横に座った。やってくるその男のたぶん背中
越しになる感じだった。

その男は防犯カメラに映っていた感じより太って見えた。年齢は3
0代の中ごろだろうか。三人が立って男を迎えると、うすら笑いを
浮かべ、そのまま空いている席に座って、三人を見上げた。言葉は
発しなかった。

「…さん、このたびは大変申し訳ございませんでした」

北沢がまず口を開いた。名前の部分は聞こえなかった。店長が次に
詫びを入れている。桜井が何か言おうとすると、「お前は何も言わ
なくていい」と男は言った。

「お前の声は聞きたくもないんだ」

三人は立ったままだった。

「それで、結論をきかせてもらえるかな」と男は北沢を見ていた。

「失礼して座らせていただきます」と北沢は言って、店長に席を勧
めた。

三人が座ると北沢は意を決したように言った。

「西田さまの仰っていたことでございますが、担当の桜井の件はご
要望には応えられません。もちろん厳重に注意をして、このよう
なことの無いよう十分な注意を払いまして今後に生かしていきたいと
思います」

聞いていて、はっきり何のことを言っているのか、弘樹には分から
なかった。ただ推察することはできる。要するに曖昧にして過ごし

てしまいたいのだ。

暖簾に腕押し、という言葉が浮かんだ。それを狙っている。慇懃無礼ではあるが、言質を取らせない官僚の答弁のようだ。

「納得できないナ」

西田と呼ばれた男は答えた。

まあ、そうだろうな。

「この男を首に出来ないなら、その責任はきっちり取ってもらおうか」

結構冴えているように思える。昔、大手の新聞はインテリが作ってヤクザが売るといわれたが、彼はマスコミ系の人間かも知れない。そこをひけらかしてもいない。嫌な奴だが、話の筋は通っている。知っていて、いちゃもんをつけている。

愉快犯のタイプなんだろうな、と弘樹は思った。予想していた危険、暴力的な場面はないことは分かった。

「どうしたらよろしいでしょうか」

北沢はあくまでも低姿勢で対応している。

「まあ、とりあえず土下座して詫びてもらおうか」

またうすら笑いをして西田は言った。

北沢は少し気色ばんだようだった。

息をのんで、一呼吸おいた。

「誠に申し訳ありませんでした」

と、一礼して立ちあがったのは店長だった。そのまま、イスを脇によけ通路に膝まづいた。なにやら感じるものがあつたかもしれない。ここでけりをつけるというような意気込みだろうか。

何か運んできたウェートレスが、トレーを持ったまま口を開けて立ち止まった。近くの客がそわそわしだした。店長はそれを気にせず、深々と頭を下げた。

「部下の者の教育が到りませんで、ご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします」

ハッキリと店長は言った。かなり大きな声であつたかもしれない。

「お許してください」と言つて、立ちあがると、西田の横にそのまま立っていた。

弘樹には店長の手が握られ、少し震えているように見えたが、西田は気に留めていないようだった。

続いて北沢も膝について、こちらはなにやら芝居っぽく頭を下げた。そうでなくてはやっていられない、という気持は弘樹にはよく分かった。桜井が立とうとしたら、西田は手を振つて、「お前はいい」と言つた。

「碌でもない部下を持つと、上司も苦勞するな」と満足げに頷いた。それから何やら話したが、弘樹は聞いていなかった。立つたままの店長が、その拳を振り上げはしないか気になった。そんなことは実際おきはしないのだが、白日夢のようなシーンが浮かんでいた。たつぷり嫌味は言いつくしたようで西田は立ちあがり帰りかけた。

「お気をつけて」と店長が、後ろから声をかけた。西田は、ちよつと足を止め振り返りそうになったが、そのまままっすぐ歩いていった。

「明るい夜ばかりではないよ」

よく聞き取れなかったが、店長がそう呟いたような気がした。それで、この事件は片が付いたのだった。

10月も半ばになって、すっかり涼しくなり北の方から紅葉の便りが聞こえてくるようになった。もう離婚の話を切り出すしか、弘樹にできることはないかと覚悟を決めた。

「会つて、離婚の話をしたいんだ」とメールを打つた。

しばらく返事がなかった。なにやらおかしい感じだった。返事が来る確信があった。メールは届いているはずだった。そこで、初めてはるかかたの消息を尋ねてみる気になった。

会社に直接電話を試してみた。受付の案内嬢は、しばらくお待ちくださいといって、音楽が流れた。

「こちら編集です」

せかせかした感じの男の声が突然聞こえてきた。弘樹はとつさに、00書店ですが、と応えた。どう思われても構わないと心に決めて、「斎藤はるかさんは居られますか」と尋ねた。

「どんなご用件ですか」

取りあえずという習慣的な感じで訊いてきた。

「以前あった問い合わせの件でお電話したのですが」

「出張中です」

ちよつと粘ってみた。

「いつお帰りですか」

「海外の研修だから当分戻ってこないかな」

その男は興味なさそうに答えた。弘樹は礼を言って電話を切った。あの深夜の電話のあと、すぐはるかとは立ったような気がした。

はるかの両親はそれぞれ結婚し、別の家庭を持つことになって、はるかは母親のところにとんと行かなくなった。遠慮しているのかもしれない。仲が悪いということではなかった。それぞれ自立したということなのかもしれない。

弘樹は母親に会うことにした。

電話をすると、落ち着いた人を安心させる声が聞こえた。弘樹はあまり好みはないのだけれど、唯一女の人の甲高い声が苦手だった。鈴のような声も好みとはいえなかった。はるかもそうだけど、その母親の声も好きだった。

自分から電話をしたことはあまりなかった。はるかに代わって話したことは何度かある。でも、驚いたようではなかった。そういう感じを与えるだけなのかもしれないが、最初にあった時から深い静かな印象は変わらなかった。しゃがれた声とは違う、独特な声質だった。どこか子守歌に似ているのかもしれない。

質問攻めにするようなことはなかった。たぶん多くのことを聞きたいのだと思うけれど、じつと相手が話すまで待っているタイプだった。自分がいぶん素直になっていくのがわかる。最初にあった日

のままだった。ひどく懐かしくて、純粹にあのときははるかを愛していたな、と思えてくる。こころの中で大事にしているものがあって、それを思い出すと身体が震えてくるようだった。

はるかに会いたいと感じた。会って抱き締めたかった。もう永遠に手の届かないところに行ってしまったのだろうか。そうなんだ、それを納得しなくてはいけないんだ、と頭の中でこだまが答える。

「では、そのときに」

約束の日時と場所をとりつけた。涙が出そうだった。

指定された郊外の駅は、弘樹が通勤している電車の途中駅だった。私鉄の連絡駅でいつもどこかを工事しているような街だった。何度か降りたことはあるが、いつも方向を間違えそうになる。それで待ち合わせは改札を出て正面に見える、オープンカフェにもらった。

奥の席ではあるが、入り口がのぞける位置に座った。遅れないよう出てきたので約束の時間までにはだいぶ時間があつた。何を話そうとしているかは、あまり考えていなかった。離婚のことだって言い出すかどうかは分からなかった。ただ会ってポツポツと話してみたかったのかもしれない。はるかに会うなら離婚の話しかなかった。でも母親なら、なにやらはるかに関連した話ができそうな気がした。そうしたかったのだ。

プライドなんだろうが、そうでもない気がしていた。

店長はあのと看、明らかに話を終わらすために土下座をしたんだ。ひどく屈辱的で耐えきれなさそうではあったけど、店長は我慢したのだと思う。そういうのは自制心というのだろうか。あそこで切れたら思うつぽだ。それに引きかえ桜井は怒りや恐怖を制御できなかった。挑発して楽しんでいるのだな、と今考えればわかる。だから店長はそれに乗ったふりをして終わりにしたんだ。

感情を表現することがひどく苦手だった。反抗期さえ、それはひど

くわがままにはなったが、親と衝突することなくやり過ごしてしまった。優等生というタイプではなく、内向的で壊れそうな心を押しかくしていたのかもしれない。

恥ずかしがり屋で、ちよつと斜に構えてはいても周りに打ち解けないことはなかった。そう思っていただけなのだろうか。みんなと遊んでいてもどこか一線を画すようなところがあつたかもしれない。ただ仲間外れにされたり、けんかしたりした記憶はなかった。先頭を切って何かをするようなこともなかった。

ゆつくり辺りを見回している、はるかの母親を見つけた。弘樹は立ちあがって手をあげた。それに気づいて彼女は顔をほころばせた。初めて会ったのは、弘樹が二十歳になる誕生日の日だった。あれから数えれば、六年が立っているわけだった。弘樹は自分だけがずいぶん年を取ってしまったように感じていた。何かひとかどの人物になれる気がしていたのが、先が全然見えてこなかった。徒に自分が朽ちていつているように感じられた。既にもう自分が抜け殻のように思えていたんだ。人が見れば、ひどく生気がないような人間に見えるに違いない。

はるかの母親は早紀といった。彼女は近づいてくると、手首だけ挙げて、弘樹の前の椅子に座った。池袋のマンションは引き払って今は東横沿線に住んでいた。資産家の後妻になったようだ。今いくつなのだろう。十歳は若く見えるようだった。明るい、温かそうな服を着ていた。

「元気なの」というのが第一声だった。

座ってすぐ、挨拶もなく顔をあげながらだった。たぶんどうしてるの、という意味なんだと思う。

「ええ、なんとかやってますよ」

ほほ笑みながら答えた。そんなにひどい顔をしているわけではないだろう。早紀は、顔つやがよく充実しているように見えた。少し太ったのかもしれない、その方がいい感じだった。

「結婚生活はどうですか」と、少し茶化すように訊いた。

「家事手伝いというの、古い家だから片付けばかりしているわ」

二人して笑った。そんなに屈託はなかった。

「はるかがいなくて大変でしょ」

どう答えたらいいんだろう。

「ええ」といいながら、今日はご機嫌伺いだなと覚悟した。

込み入った話は弘樹がするべきではないんだなと納得した。

はるかはおーストラリアに行く前に、早紀のところに現れたようだった。

「急に決まったようなの。はるかが決めかねていたようだけど、主婦としたら当然よね」

すこし伏し目がちにしていたが、そのとき顔をあげた。

どうなの、という表情をしていた。弘樹は何も言わなかった。これはいつも通りの反応だった。口を少しすぼめたかも知れない。早紀はそれをどう判断したか、話を続けた。また頼んだ紅茶の白いカップを見ている。

「あの子は、自分でなんでも背負いこむの、それで自分で判断して曲げないの。頑固なのは父親似ね。決して非難してるわけじゃないのよ」

そして意を決したようにカップを取り上げ、一口飲んだ。この仕草ははるかに似ている。BGMの弦楽器がかすかに聞こえた。まわりはガチャガチャして静かな環境ではない。街の雑踏のようだった。ただ大きな声を出していないのは周りの席に人がいないからだだった。入り口の近くのオープンになったスペースは人が一杯だった。

「はるかには少し重い目があるの。離婚の決断は変えられなかったけれど、はるかが苦しむのがわかっていたから。もちろんはるかは賛成してくれたし、ちよつと不安定になっていた私を支えてもくれたわ。でも、はるかの家庭はなくなってしまったの。二人で暮らしてもそれは家庭ではなかったわ。同居人ね。はるかがあなたと付き合い始めたと聞いてほつとしたの」

早紀は何を言おうとしているのだろう。弘樹は彼女の肩越しにフ口

アを眺めていた。向かいのカウンターの女性と目があって、慌てて首を戻して額を指で搔いた。

「ひどく印象的でした。都会の人たちの生活をのぞくようで、不思議な感覚だったな。食べたことのない料理も出てきたし」

「たくさん食べてもらって、うれしかったわ。二人でいれば料理らしい料理も作らずに過ごしてしまうから。来てくれるのは楽しみだった」

「そうですか、私の方には遠慮があったかな」

「そういうところかはるかの好みなんですよ。なれなれしい人は苦手みたいだから」

「いったい全体、はるかには弘樹に何を望んでいたのだろう。そして今それがなくなっているのがわかる。」

「ご免なさい、と急に謝りたくなってしまふ。あなたのお嬢さんをばくは助けることができなかった。はかなげに立つて、実際はしっかりとした足取りではるかは進んでいるのだろうか。実際は逆なのか。どこかで交錯して、曖昧に笑うはるかが思い浮かぶ。」

「もうあなたは必要でなくなったの、と額に烙印を押されたようだ。そうだったのか、愛想を尽かされたというわけか。今更ながら不在の意味が持ちあがってくる。」

「お互い未練を断とうと、もがいているのかもしれない。」

「はるかは何か自分について言っていましたか、と喉まで出かかって口には出せない。」

「私が聞きたいわよ、ときつと早紀は答えるだろう。」

「決まったことしかはるかは口にしなかった。若くあるからこそ、自分のスタイルを強調するのかもしれない。怖かった親がやさしく見えてくるのはやはり年のせいなのだろうか。急に逝った母が気弱に思えたのはいつからだったろう。」

「はるか是一本気で、前を向いたらそこしか見えない。彼女はきつと何かをつかむのだろう。そのバネになっているとしたら、自分も役割を果たしたのかもしれない。」

弘樹の青春は苦い思い出になるのかもしれない。

ふたりの時 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7937o/>

ふたりの時

2011年7月27日22時34分発行